



知命の齡が近づきつつある人 すべてに薦めたい一冊

[評者] 清水將之 元日本児童青年精神医学会理事長

あこがれの老い 精神科医の視点をこめて

服部祥子

定価 2100 円(本体 2000 円+税 5%) 医学書院 03-3817-5657

あこがれの老い

精神科医の視点をこめて

服部祥子



医学書院

●老いを考えるということ

高齢者問題が、国家財政、営利福祉、人情・家庭事情など幅広く話題となる時代なので、老人や老齡を語る書物が陸続と刊行されている。老いについての書物は、若い頃に触れたキケロ以外はほとんど読んだことがない。本書は例外である。

老いをあこがれる、とはどういうことか、と訝った。しかし、読んで、著者の思惑がわかった。

1 年間の雑誌連載を纏めたという成立にも由るのだろう、12 通りに老いが類型化されている。みな魅力的である。そのすべてに著者は強い憧憬を寄せている。ここから書名が誕生したのであろう。才女が、思いつくままに連載メモを作っていたら、望ましい老いが 12 か月分となったのか。

須賀敦子についての語り(第 9 章)のみが他に比して異様に長文となっている。どうしてか。著者の生と重なり合うところがあるのだろうか。そこは、読者それぞれが揣摩臆測に興ずればよろしかろう。読書というものの楽しいところでもある。

●青年期と老年期

著者は、評者が始めた思春期の精

神科医療を、同じ土地で力強く継承・展開してくれた後輩である。そのような職種事情のため、人を測るこの著者の視点は常に、幼少期からの育ち、そして思春期における成熟への大転換を基点としている。

老い行くことに關しても然り。このところが恐らく、山積する老年本と大きく異なるのであろうと忖度する。

一例のみ挙げれば、西行の生涯を追った第 2 章。20 歳過ぎと 70 歳と、半世紀を分けた同一人物の詠唱を並べ、青年期にしてすでに西行は成熟を果しており、古希を迎えてなお若さを維持していることへの賛嘆を語っている。

●美しく老いる準備

幼児期に愛されることが思春期の通過を一層安全にし、思春期に悩み苦しみ、そこを支えられ信頼されることが成熟を保障する。そのことのために児童思春期精神科医は存在する、著者はそう考えつつ臨床を重ねてきた。

この人は「生きる力の火種」ということばを愛用している。思春期は火種を培う年頃、それが成立すればおとなに向けての成熟過程が安定する

という。

今回の書物では、火種が培われておれば満たされた老年期を歩むことが可能になると拡張し、さまざまな人生事例からこのことを説伏しようと企てる。

●老いへのあこがれ

老年期に達したがゆえに見えてくるもの、味得でき腑に落ちること、遠慮なく語れることば(この書評も含め)がたくさん用意されている。そのことを、評者も古希を超える前後から実感しつつ暮らしている。そのような枠組に座して本書をひもとけば、生の多様な読みようを教えられ、来し方の意味を改めて考えさせられる。そのような書物である。

青年期に本書を読んで感動する人が居たとすれば、不気味である。壮年期では、この域まで視線が届き難からう。耳順(60 歳)ではいささか遅い。いまの不惑は元氣過ぎて読み流されてしまうかも知れない。知命(50 歳)の齡が近づきつつある人はすべて、本書に接することを薦める。さすれば、必ずや、充実して穏やかな老後を喫する可能性を見出すであろう。